

令和 6 年度 野生鳥獣との共存に向けた生息環境等整備調査（屋久島地域）

報告書要約版

(1) 生息密度調査（糞粒法）

【調査内容】

- ・ 下記 5 地点の調査結果からヤクシカの生息密度を推定し、地域間比較等を行った。さらに、過去にも調査されている地域に関しては、推定生息密度の増減と増加率を求めた。
- ・ 一湊林道（北）、愛子西（北東）、尾之間下（南）、大川林道奥（中央）、宮之浦林道（中央）

【結果】

- ・ （増加）一湊林道、尾之間下 （減少）大川林道奥、宮之浦林道 （変動なし）愛子西
- ・ 増加 2 地域は通年捕獲によりシカの移動が多く、警戒心の強い個体の出現が考えられ、減少の大川林道奥、宮之浦林道では昨年それぞれ 65 頭、109 頭捕獲した効果と考えられる。

(2) 植生の保護・再生手法の検討

【調査内容】

①植生保護柵の保守点検

- ・ 既存植生保護柵 31 箇所（植生保護柵 23 箇所・萌芽枝保護柵 8 箇所）の維持管理。

②マテバシイ 萌芽枝の生育状況

- ・ 柵内外のマテバシイ母樹、萌芽枝、及びカシノナガキクイムシの穿入痕調査を実施。

③植生保護柵内外の植生調査

- ・ 柵内外それぞれ 2m×2mの小プロットを 4 地点設定し、低木層（1m以下）と草本層について植物社会学的調査を実施。

④植生被害ライン調査

- ・ 一湊林道（北）、愛子西（北東）、尾之間下（南）、大川林道奥（中央）、宮之浦林道（中央）

【結果】

- ①8 月の台風 10 号の襲来によりカンカケ（西部）・中間（南部）で倒木が発生し、大規模な柵の破損が確認された。愛子岳（北東部）、尾之間（南部）では軽微な補修で済んだ。
- ②対象のマテバシイは北上する台風の影響を受けて倒木が柵内外で発生し、柵の破損を生じた。萌芽枝全体では昨年度から柵内外の本数が増加した。柵外の萌芽枝は特に生存本数に増加がみられるが、ヤクシカの口が届く箇所にある生存した萌芽枝の多くは、アブラムシ類や、萎凋症状等の病虫害に罹患しており、ヤクシカが採食しなかった可能性がある。
- ③種数及び実生本数は、多くの地区で柵内の方が柵外より多かったが、食害の激甚なカンカケ 600m は種数で柵外の方が多く、実生本数では柵内より少なかった。柵内は進入できる種の入り込める余地がほとんどない一方で、柵外は植生の被度が低い箇所が点在し、そこに柵内では確認できない種の出現が見られる。しかしその多くは 1～2 個体と少ないため、実生本数は増加できないと考えられる。
- ④（大川林道奥）出現本数・被害有の本数とも減少。（一湊林道）種数・被害有の本数は緩

やかに減少、出現本数は増加。・（愛子西・宮之浦林道）食害が少なく、種数・出現本数とも緩やかに増加。（尾之間下）種数・出現本数が増加したが、被害有の本数も増加。

（3）森林生態系の管理目標に関する現状把握・評価

【管理目標】

- ①屋久島の多雨環境を反映したシダ植物の林床被覆の回復②屋久島世界自然遺産の顕著な普遍的価値である植生垂直分布を形成する植物種の多様性の回復③ヤクシカの嗜好性植物種の更新④絶滅のおそれのある固有植物種等の保全

【現状評価】

- ①多くの地点で柵内外の被覆率が目標に至っていない種が多く見られた。
- ②継続して目標に至っていない標高帯が多かったものの、標高 200m、800m、1200m 地点において 2004 年の確認種数以上となり、目標を達成していることが確認できた。
- ③標高 800m と 1000m で計 3 種の新規確認により確認種数の増加が見られた。標高 1200m では確認種数、被度を維持していた。一方、その他の標高帯では、嗜好性植物種の消失および消失の継続（標高 0m、400m、1300m）や被度の減少（標高 600m）が見られた。以上より、標高 800m～1200m を除き目標となる回復・維持増加には至っていない状況である。なお、標高 800m～1200m については種数の点からは目標を達成している。
- ④生育確認地点数については、地生種が目標となる維持増加には至っていない状況であった。また、着生種は地点数を維持していたものの、確認種数が減っている地点があり、今後の状況に注意する必要がある。生育個体数については、地生種・着生種ともに 5 地点で維持増加し目標を達成している一方、減少または消失し目標に至らなかった地点もあった。これらの地点については注意する必要がある。

（4）高層湿原におけるヤクシカの生態調査

【調査内容】

- ①自動撮影カメラによる分析
- ・夏季から冬季にかけて自動撮影カメラ 10 台を 20 週間以上設置し、画像データを分析。
- ②糞塊調査
- ・冠水状況と植生群落状況から区分し、花之江河 33 箇所、小花之江河 22 箇所を実施。

【結果】

- ①成獣雌雄、幼獣とも単独で活動する個体が多く、ヤクシマザルは昨年のような大きな群れは確認されなかった。100 日当たりのヤクシカの月別撮影頭数は花之江河で 8.2 頭、小花之江河で 7.0 頭となり、ともに昨年より減少した。両湿原でタヌキは確認されたが、ノイヌ・コイタチは確認されなかった。
- ②花之江河では夏季、秋季ともに糞塊数と糞塊確認箇所数の両方が昨年度より減少した。小花之江河では秋季に糞塊確認箇所数で増加した。暑さを避けてシカが森林内へ移動したり、出現するシカが昨年度より少なく、両方の湿原に分散していたことが考えられる。